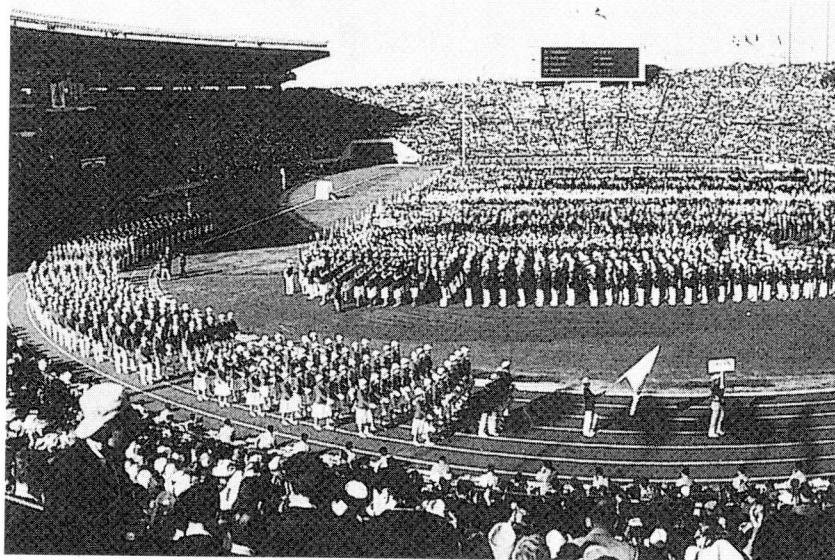


# 日本オリンピック機構の誕生まで 苦労で眠くて楽しい五輪の思い出

天野 幸一 (TBS・TUF)



秋晴れの下、東京オリンピック開会式

題字 中川 順

今年のオリンピックは発祥の地  
アテネで開催される。

私のオリンピックとの出会いは  
少年のころに見たベルリン大会の  
記録映画『民族の祭典』と『美の  
祭典』だった。満員の映画館で背  
伸びながら見た感動は今も鮮明  
に覚えている。1936年大会。  
ヒトラーの命令でレニ・リーフエ  
ンシュタールが製作した映像は、  
スポーツの躍動感をモノクロの美  
で完璧に描いていた。

長じてラジオ東京(現TBS)  
に入社、自分がオリンピックの放  
送に携わることができたのは夢の  
ようである。21世紀最初のオリン  
ピックの年に、私自身の放送の記  
憶を綴つてみたい。

## 技術革新、映像進化、 共同取材への道のり

オリンピックのテレビ放送は、  
フィルムからVTRに、更に衛星、  
中継へと技術革新の歴史であり、  
モノクロからカラーへ映像進化の  
歴史であり、映像の購入から自主  
取材、NHK独占、NHKと民放  
の共同取材という放送体制変遷の  
歴史でもある。

日本のテレビが開局して最初の

オリンピックは1956年のメルボルン大会だった。まだテレビは現地局のフィルムを購入、航空便で運ぶという数日遅れの放送しか出来なかつた。平泳ぎの古川勝が潜水泳法で圧倒的な強さを見せて金メダルを獲得した映像も、結果はすでに誰もが知つてゐた。

次のローマ大会では、NHKがイタリア放送協会と独占契約を結び、民放はNHKとの共同制作を拒否された。この頃、東京の民放テレビは4社。地方でも続々開局しており民放側の不満がつのる。協議の末、NHKはクレジットなしで映像を民放に分配、実況アナウンスはNHKと決定。この大会からVTRと衛星電送の時代が始まつた。VTRは鮮明だつた。

だが思わぬ落とし穴があつた。イタリアと日本では映像電送方式が異なるため、現地の映像を受けたKDDの山口でNTSCに変換する必要があつた。NHKの技術にはこの面倒な作業が加わつた。さらに、時差の関係で配信は真夜中が通常で眠い目で受けた2週間

で、ラジオはNHKとラジオ東京が実況中継をしたが、テレビは、現地局のフィルムを購入、航空便で運ぶという数日遅れの放送しか出来なかつた。平泳ぎの古川勝が潜水泳法で圧倒的な強さを見せて金メダルを獲得した映像も、結果はすでに誰もが知つてゐた。



裸足の王者、アベベのTV出演

いよいよ東京オリンピック  
民放初の実況アナウンス  
1964年の第18回オリンピック  
の東京開催が決まつたのは59年

が続いた。今でもオリンピック放送の印象といえば“眠かつた”的一語につきる。

この大会で世界中が驚いたのは裸足のアベベだ。長距離でのアーフリカ勢の強さを示す幕開けの大会だったといえるが、まさか4年後の東京大会で連覇するとは想像もしなかつた。

だつたといえるが、まさか4年後の東京大会で連覇するとは想像もしなかつた。



マラソン中継のシミュレーションをする中継車

のIOCミュンヘン総会だつた。ローマの閉会式では、電光掲示板に「アルデベアルチ・トウキヨウ」の文字が鮮やかに浮かんだ。今度こそ出番だ。夢が膨らむ。早々に放送計画の立案に入つた。

63年5月、TBSはオリンピックコースを走る「毎日マラソン」をテレビで完全中継して実績を積み、NHK、民放の混成チームによる放送実現に自信を深めた。

しかし、オリンピックの放送は一国一放送機関という規定があり、米国では三大ネットワークのいず

れかが大会ごとに放送権を獲得、

独占放送となつてゐる。NHKと

民放のトップ会談を開くなど糾余

曲折をかさねたが、結局、NHK

内部では共同制作になれば、民放のアナウンサーがNHKの電波に登場する、これを頑なに拒否する空気もあつた。

粘り強い交渉の結果、次の条件が民放共同デスクに認められた。

①陸上競技など8種目では、民放

の実況アナウンスをつける。

②ボートなど8種目は映像、音声

共にNHKを受ける。

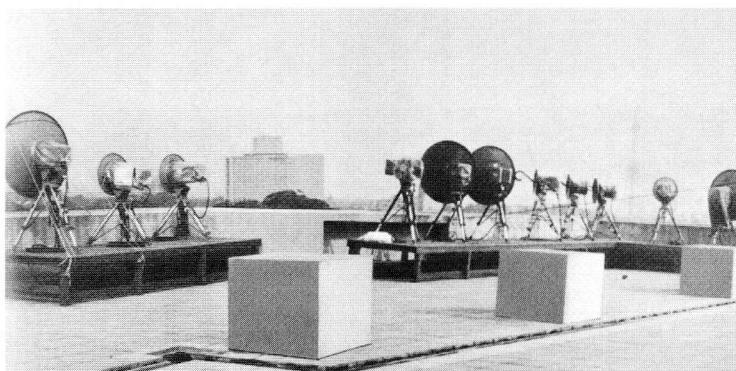
③開会式と閉会式はNHKの映像

に各局が個別にアナウンスをつける。

民放は、共同デスクのアナウンサーが日本選手のメダル有望種目の実況アナウンスが出来ることになつた。この音声差し替えは画期的だつた。日本選手の活躍を担当したアナウンサーや担当者の熱気と誇りが民放のテレビ中継を盛り上げた。その後、海外では、開催国が制作する国際映像に各国が自国向けのアナウンスを乗せているのが当たり前になつたが、この時は自分たちでアナウンス出来るこ

と自体が感激だつた。

### 開会式は初のカラー映像 民放のアナウンスが全国へ



準備の整つた中継センターのパラボラ

開会式当日は、皇居前広場から聖火がオリンピックスタジアムまでリレーされる模様を独自に中継する体制を整えた。前の夜は雨。しかし、一夜明けると素晴らしい

秋晴れの空が広がり、アジア初のオリンピックを祝うのに相応しい

開会式中継だつた。

NHK放送センターから、毎日6種目の映像が赤坂TRC経由で各キー局に送られてくる。通常、TBSの中継受けは2中継が限度のところに、オリンピックだけで6中継。TRC屋上にはパラボラが乱立し、社内のスタジオにも6台のモニターが並ぶ。VTRも、同時に3~4台稼動する。テープも200本用意。スタジオには、選手の顔写真を瞬時に出すレコードダック、陸上、水泳のタイム表示機も設置して万全を期した。一つ残念だつたのは、米国で開発されていたVTRのスローを購入して欲しいという要望が通らなかつたことだ。すでにNHKとNTVが準備していただけに尚更だつた。

ラジオは、NHKと民放側との話し合いで民放各社一体となつた共同デスクを結成、民放も独自のマイクによる放送を実現した。大会は日本が16個の金メダルを獲得。その映像が民放のテレビ、民放のアナウンスで全国に流れ、喜びは今も忘れられない。

一寸した裏話もあつた。代々木

の選手村に小さなホールがあつたが、大会の中ごろ、選手の慰問になればと思いつくショーケースを企画した。事務局も快諾、演出部の協力で、当時人気が出始めた弘田三枝子が出演。会場は満員で選手たちの拍手と歓声が鳴りやまず大成功だった。

### 苦労したCM送出

CMには大会憲章とアマチュア規定による厳しい制約があつた。選手、国旗、聖火に重なる映像にスーパーCMは挿入できない。中継画面は国際映像で、CM送出時にカメラをロングには出来ない。結局、取りきりCMにするしかなく、インターバルにしかチャンスはない。機械的にCMを消化していけば同一画面のNHKに視聴者が奪われる。これは視聴率調査の結果でも明らかで、民放は苦しい作業の連続だった。今では、選手のCM出演、ユニフォームや用具のスポンサー名もOKと規制も大分緩和されてきているが。

### NHKと民放の理解が進む

次の1968年のメキシコ大会ではNHKに一切を任せ、NHK

映像と実況を受ける。共同デスクのチーフだった私の仕事は、大会期間中に内幸町のNHKに通つて

民放各社に配信の連絡をするのが主だった。オリンピックでは最も楽な勤務だ。

こうして回を重ねていくうちにNHKのオリンピック関係者とも親しく話が出来るようになつた。

民放アナの声がNHKの電波に乗ることを頑なに拒否する姿勢や共同取材の可能性なども話題にしてやがて一緒に仕事が出来るようになる、そんな感触も得られるようになってきた。これが札幌大会の伏線にもなつていて。

1972年、冬季オリンピック札幌大会。共同取材の要員構成は当時の地元2局、HBCとSTVを主体に考え、1年前のプレ大会から準備に入った。

テレビはNHKが国際映像制作を担当。民放は希望種目の音声を

差し替えることになつた。開会式前日まで雪が降り続いたが、当日の空は真っ青に晴れわたつて東京大会を思い出した。セレモニーの最後に登場した800人のチビッ子スケーターが、手にした風船を放ち、五色の花火が札幌

の空を彩つて美しい。

日の丸飛行隊が日本中を興奮させた11日間。閉会式のときは放送センターにいたが、モニターを見つめる地元スタッフが涙して感動する姿に接し、民放は一体という充実感を味わつた。

余談になるが、札幌は大会に合わせて地下鉄を建設。ゴムタイヤの乗り心地と共に、全国で初めての自動改札の磁気切符に驚いた。ところが、報道陣に配られた優待パスをテープレコーダーの上においていたスタッフがいた。切符の磁気信号に狂いが生じて、改札では不正使用のブザーが鳴り響くという失態で、厳重注意をしたが、今では笑い話である。

72年当時は、冬季と夏季の大会は同じ年に開催されていた。8月のミンヘン大会では、開会式と閉会式のみNHKと民放は別々のマイクと決まつた。

この大会では、NHKが70年ごろから放送権料の交渉を、民放分も含めて交渉を重ね、102万ドルで契約が成立していた。こうした経緯もありNHKの斡旋で大会の1年前に現地を視察した。これによつてオリンピック放送のため

の豊富なデータが得られた。会場の周辺には緑と花、池まで作られた素晴らしい環境でドイツの五輪委の環境への配慮に感嘆した。

本番ではラジオ担当。放送席の設備にいろいろと不満はあったがNHKスタッフの助言に助けられたこともあった。体操競技の得点計算に当時出はじめた電卓が欲しかったが、まだ高価でソロバンを持つていった。遠い昔である。

5個の金メダルを獲得した体操選手の喜びの声をテープに収めてもテープの再生機はない。解説用のマイク端子につなごうとしたら放送席の係員が近寄ってきた。機器の操作を注意されるのかと一瞬緊張したが、英語で「おめでとう」と言いにきてくれたのだ。

マラソンのコースは途中に環境を守る公園があり電気自動車以外の伴走車使用は許可されなかつた。放送車なしで途中ポイントをおさえ、テレビと共同の電話実況で乗り越えた。

### 悲劇のミュンヘン大会

大会も10日過ぎた9月4日夜。睡眠は平均5時間。体操、水泳も終わり明日は陸上の中休みで、峰

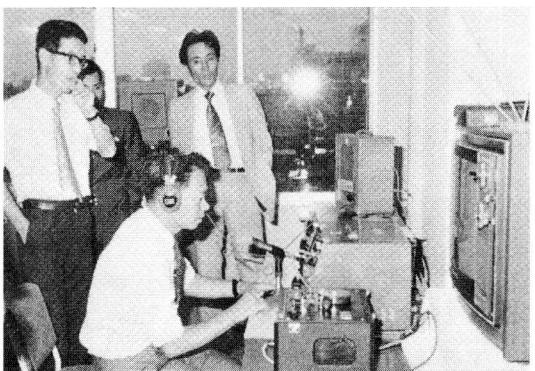
は越した。宿舎の一室で反省会と残りをしつかりやろうと慰労会を開いた。午前3時頃、明日はゆつくりと床についた。

朝8時半、電話がけたましく鳴った。「アラブゲリラ選手村に侵入」「イスラエル選手殺害」、第一報は、なんと国内共同デスクからだつた。早出組は9時からの男子バレー中継に備えていたが、他のスタッフは急遽放送センターに集合、選手村に神村アナと松沢テレビ班ディレクターが入った。直後に選手村は入村禁止になつたので、この素早い行動は見事なものだつたと言えよう。プレスセンターには石井アナと通訳を配置。放送センターでは深沢アナと通訳がドイツDOZのテレビから得た情報報を東京のラジオ共同デスクに送る。カセットトレコーダーと電話ピックアップによる録音再生送出、通訳を通して深沢アナが伝える現場の生々しい状況は、このテロの不足がちな情報をカバーした。

テレビはニュースワイドの生出演を要望してきたが、スタジオもカメラも民放ではなく、衛星回線もなく、不可能だつた。この時、NHKはオリンピック素材として

事件発生の午後からはすべての競技は中止され、ラジオ班は事件取材一本に専念した。翌6日午前1時過ぎまでレポートを続け、事件は銃撃戦の末に、人質、グリラともに死亡という結末に終わる。このテロ取材についてのラジオ班の判断と行動は今も最善だったと思つている。

翌日午前、イスラエル選手11人



専用回線で東京—ミュンヘンが結ばれた

の追悼式では、競技場に、ドイツならではの重厚な演奏による葬送行進曲が流れ、人びとは深い悲しみに沈んだ。この演奏はカラヤンの指揮だったとも聞いた。そして午後になると、何事もなかつたように競技は再開された。それが非情なのか、あるいは、オリンピックというものなのか。



ミュンヘンで、今村、渡辺、植草、右端筆者

最近のオリンピックでは、電光掲示板にいち早く成績が表示され、現場のアナウンサーやスタッフの仕事はかなり楽になつていて。ふりかえると、私が現場にいた

今は昔のものがたり

76年、モントリオール。この時N H Kと民放の共同取材がやつと実現した。東京大会から12年を経過して、大会ごとに高騰する放送権料、現地番組制作費、衛星中継費などの負担に、さすがにN H Kも耐え切れず、合理化による共同取材を選択するようになつた。

もう一つ大事なのは、事前に競技を知り、競技の用語を外国語で覚えることだ。

今は国際映像でも、瞬時に記録表示が出る。ソロバンや電卓は昔話である。

#### 放送権料の高騰でN H Kと民放の共同取材実現

頃は一番早いのが場内アナウンスで、はじめが開催国の言葉、次が英語で、ミュンヘンでは三番目がフランス語だった。プレス会見も同様で、フランス語の通訳は三番目が大切なのに、その前の言葉で理解してしまった記者たちが私語を交わすのに邪魔され、イヤな顔で「静かにして」が再三だつた。ヨーロッパでは二ヶ国語が出来るのは当たり前で、外国语が苦手な私はこんな苦労は思い出したくもない。

遅々としながらも、努力し進展してきた長い年月だつた。名称は日本オリンピック機構(J O P)とした取材団が誕生した。この大会でも、開、閉会式だけはN H Kと民放が別マイクだつたが、競技では、テレビで柔道など5種目、ラジオは、マラソンなど6種目を民放が担当。民放アナウンサーの実況がN H Kの電波に乗つた。そして現在に至つては、ジャパンパークのはじめての取材団には、反省すべき点もあつたが、チームワークは上々でまずまずの成果を収めたといえよう。

今では、国際映像に加え、日本選手に焦点を合わせた取材カメラも見られるようになつた。今年のアテネ大会で、J O Pのさらなる飛躍と成功を心から祈願して私の思い出話を終わりたい。

放送権料 3億9000万円  
共同取材経費

N H K分担 6億232万円  
民放分担 1億7000万円

民放は分担金を一定比率で全社で負担している。

写真提供  
民放連

T B S